JA共済

JA共済 地域貢献活動

PROJECT STORY

農業のために
地域のために
明日のために

JA共済の
地域貢献活動

VOL.08

静岡県 JA静岡市

［じまんの農業塾］

令和7年3月

JA静岡市
営農経済部
営農課 主任
堀川晃宏さん

地域住民に農業を学ぶ場を提供し産地を支える担い手を育成したい

初心者から直売所の出荷者を目指せる農業塾

**静岡県のJA静岡市は、直売所に出荷する生産者の育成を目的に
野菜の栽培技術や販売方法を教える「じまんの農業塾」を開催しています。
地域住民から、農業に関心のある人や新規就農希望者を広く募集し
１年間の講習を経て直売所の出荷者として活動できる即戦力を育てます。
JA共済連は「地域・農業活性化事業費」を活用し
地域農業への新規参入を促す取り組みを支援しています。**

高齢化で直売所の出荷者が減少 課題解決に向けて3部門が連携

静岡県の中部に位置する静岡市（葵区・駿河区）は、南アルプスから駿河湾に至る豊かな自然環境に恵まれる一方で、政令指定都市として商業地や住宅地を多く抱える地域でもあります。

JA静岡市が葵区、駿河区の管轄内４箇所で運営する直売所の「じまん市」では、特産品のお茶やみかんを始め、米や野菜、果物など、地域で生産される多彩な農産物を販売しています。静岡市（葵区・駿河区）は市街化区域が多く、小規模農地で少量多品目を栽培する農家も多いため、大量出荷が難しい組合員の販売先としての役割を担っています。

しかし近年は農家の高齢化が進み、じまん市の出荷者数・出荷量ともに減少。特にこの数年はその傾向に拍車がかかり、正組合員による出荷だけでは、いずれ売り場を維持できなくなるとの懸念が強まっていました。

新規参入の間口を広げるには、農家以外の人が農業と関わる機会を増やす必要があります。そこでJA静岡市では、営農経済部 営農課、販売部 直販課、企画部 企画課の３部３課が連携し、准組合員や地域住民を対象に、担い手育成につながる企画の検討を始めました。

「それ以前も営農経済部が運営する市民農園で農業体験を実施するなど、一部の課や担当者が地域住民と農業の接点づくりを試みたことはあります。ですが、農業に興味を持つきっかけにはなるものの、生産者や販売者の育成につなぐ体制がなかったため、体験するだけで終わってしまったという反省がありました」と、営農経済部 営農課の堀川晃宏さんは、組織横断で企画を立ち上げた背景をこのように説明します。この連携から生まれたのが、令和3年春に開講した「じまんの農業塾」でした。

半年以上に渡り協議を重ね部門間で異なる意見を調整

「じまんの農業塾（以下、農業塾）」の企画検討が始まったのは令和２年４月。そこから農業塾の開始を決定するまで、約7ヶ月に渡り３部門で協議を重ねました。３つの部門で共通した業務が少なく、部門によって立場も異なるため、部課長クラスも参加して何度も話し合ったといいます。

調整に最も時間を要したのが、「ゴールをどこに設定するか」です。「企画部から『まずは農業との関わりが少ない人に、その機会を提供できればいいのでは』との意見が出た一方、営農経済部や販売部は『農業の担い手や出荷者の育成に重きを置きたい』との考えでした」と営農経済部の堀川さんは説明します。

とはいえ、地域農業の担い手を増やしたいという思いは、三者とも共通しています。互いの意見をすり合わせた末に、「地域の人が農業に触れるとともに、最終的にじまん市の出荷者になること」を目標とすることで合意しました。

運営体制については、営農経済部が栽培講習、

堀川さんを中心に左が販売部直販課の白鳥さん、右が企画部企画課の伊藤さん。JA静岡市のチームワークを表す1枚

塾生たちに収穫時のポイントを説明する堀川さん

販売部が販売講習、企画部が事務全般を担当。仕事を持つ人も通いやすいように、受講は月1回とし、2年かけて生産技術から販売方法まで通しで学ぶことができるカリキュラムを組みました。

加えて、じまん市の店頭で塾生が野菜を実際に販売する「体験」も組み込むことに。販売部から出された「自分が育てたものが売れるという体験が、出荷への意識づけになる」との意見を反映しました。

塾生の募集は、JA広報誌やホームページなどで告知。農業仲間を作りたい人、実家や親類の農業を継ぎたい人、未経験から新規就農を目指す人などを幅広く募り、応募者から抽選した10名を塾生に迎えて、令和３年4月に農業塾が開講しました。

実習に必要な環境の構築をJA共済連の助成金がバックアップ

こうして始まった第1期は、無事に2年間のスケジュールを終えたものの、初の取り組みの中で課題や改善点も見えてきました。

1つは講師が多すぎて、塾生の間に混乱が生じたことです。種苗会社や農機メーカー、経済連などから外部講師を招き、営農経済部職員も複数名が交代で栽培講習を担当した結果、塾生が相談したいことがあっても、誰に聞いていいかわからない状況に。そのため1期目の途中から、特定の営農指導員1名をメイン講師に据え、必要に応じて外部講師を入れる形に変更。2期目からはメイン講師を堀川さんが担当しています。

もう1つは、販売部を中心に「より短期で即戦力を育てたい」との声があがったこと。直売所は地域住民が地域の特産物や生産者と触れ合う大事な接点であり、じまん市の維持は地域農業の振興を図る上で喫緊の課題です。よって少しでも早く出荷者を増やしたいとの強い思いがありました。

そこで再び3部門で調整を重ね、2期目から月2回・1年間のカリキュラムへ移行。学びの密度を高め、修了後すぐに出荷できる担い手の育成を目指すことにしました。

さらに2期目からは、先輩農家での実習を追加。もともと構想はあったものの、実習の受け入れ先の選定や調整が必要だったため、遅れてのスタートとなりました。

「塾生が直売所への出荷という未知の世界に飛び込んだ時、先輩農家に顔見知りがいれば頼りになります。第2期と3期は玉ねぎ農家で定植作業を手伝い、『農家の仕事を現実的にイメージできた』と塾生からも好評です」

そして講習の効果を上げるため、実習用の設備の拡大も決断しました。当初使用していた畑に加え、新たに880㎡の圃場を借りて整備し、農業用ハウスも建設。その際に大きな支えとなったのが、JA共済連の「地域・農業活性化事業費」です。JA共済連 静岡では、圃場整備が始まった令和4年から、この助成金を用いて農業塾の活動を支援しています。

「農業塾は意義のある取組み」と語るJA共済連 静岡の疋田貴代美さん

「これだけ大きな設備投資をJA単体で行うのは難しい。JA共済連から助成金を頂いたおかげで、塾生のために立派な圃場や施設を用意できて感謝しています」と話す堀川さん。一方、JA共済連 静岡の疋田貴代美さんは、農業塾を「農家の減少が進む中、新たな担い手の就農を後押しする取組み」と高く評価します。

「農業体験で終わらず、直売所への出荷をゴールとしたところに、JA静岡市の本気度の高さを感じました。新規就農者が増えれば、耕作放棄地の解消や食料自給率の向上にもつながります。その点でも農業塾は意義のある取り組みで、私たちもJAの支援を通じて、農業振興に関われることを嬉しく思います」

第3期生は10名中5名が修了後すぐの出荷を予定

いくつかの改善を経て行われた第2期・第3期は、1年間で夏野菜と秋冬野菜を栽培し、収穫時期に合わせて販売体験を年2回実施。塾生は出荷のルールや農薬・肥料の知識、価格設定や袋詰めなどを学んだ上で、販売体験に臨みます。またJA共済連が提供する「農作業事故体験VR」を活用した安全講習もカリキュラムに加わり、農業初心者の塾生に農作業中の危険を周知するのに役立っています。

全ての講習を修了すると、じまん市に出荷できる有資格者として認定されます。以前は正組合員のみが出荷できる規約でしたが、販売部から出荷委員会に働きかけ、総会で規約を変更。農業塾の修了生は、出荷者として登録できる仕組みにしました。

「ひと昔前なら農家以外の出荷を認めることに抵抗を感じる人がいたかもしれませんが、今は正組合員も担い手の減少に危機感を強めていて、規約変更を希望する声も多かったです」と堀川さんが話すように、地域の生産者も農業塾の活動に期待を寄せています。

手塩に掛けて作った野菜を収穫する塾生

令和7年1月25日。この日は3期生が秋冬野菜の販売体験を行いました。塾生たちは朝から畑に集まり、堀川さんのアドバイスを受けながら、自分が育てたキャベツや大根を収穫。じまん市へ搬送し、販売部の白鳥さんによる指導のもと、パッキングや値付けをして買い物客に対面販売します。

丁寧にパッキングをしたあとは大きな声で接客も

「採れたての野菜はいかがですか！」と塾生たちが呼びかけると、販売コーナーには人だかりができ、野菜はあっという間に完売。好調な売れ行きに塾生たちも笑顔を見せました。

栽培技術に加え、販売ノウハウの指導にも注力した結果、これまでに1期生から1名、2期生から4名の出荷者が誕生。3期生は5名が修了後すぐに、2名が翌年以降の出荷を予定しており、順調に担い手が育っています。

家庭菜園の経験しかなかったという塾生は、「私の周りにも農業に興味を持つ友人がいるので、ゆくゆくは大きな畑を借りて、仲間と一緒に農業をやりたい」と目標を語りました。

JA共済連 静岡の疋田さんも「定員10名のうち半数以上が出荷者になれば大きな成果。1期につき5名として、10年続ければ50名の出荷者を輩出できますから、地域農業への貢献度は非常に高い活動だと思います」と農業塾の育成力を実感しています。

修了後もJAが活動をサポート 青壮年部や女性部に加入する人も

農業塾は地域住民がJAに親しみを持つきっかけにもなっています。塾生からは「農業経験が浅い自分にとって、JAに相談するのはハードルが高いと思っていたが、農業塾の指導員は気さくに何でも教えてくれるので、距離が近くなった」「JAは農家のための組織だと思っていたが、農業未経験者もオープンに受け入れてくれるんだと印象が変わった」などの親しみの声が聞かれました。

さらにJAの活動に参加する塾生や修了生も現れています。3期生の一人は、実習で訪れた先輩農家に勧められ、JA静岡市の青壮年部に加入。「会合に参加したら、部員の皆さんが地域農業を盛り上げるために熱く語り合っていて、自分も農家として地域に貢献したいと思うようになりました」と話し、地域農業の担い手となる自覚が芽生えた様子です。

2期生として学び、現在は耕作放棄地を借りて営農する修了生は、地元の女性部に加入。農産物の加工を学んだり、農業祭に参加したりと、地域の人たちと交流を深めています。一方で、農業塾の修了後も営農課の堀川さんを始めとするJA職員のサポートを受けており、「農地を借りる際に地権者との交渉に同席してくれたり、農地整備を手伝って頂いたりと、何度も助けてもらっています。今の私にとって、JAは困った時に頼れる心強い存在です」と感謝の言葉を口にします。

「卒業後も何度もJAさんには助けていただいています」と語る2期の修了生

堀川さんは今後の展望について「修了生向けの講習会なども企画し、出荷登録者はもちろん、出荷していない人にも引き続き農業と関わる機会を提供したい。すぐにプロの農家になるのは難しくても、『買う・食べる・料理する・食育を実践』など、農業を応援する手段はたくさんある。そんな仲間を増やすこともJAの大切な役割です」と語ります。

JA共済連の疋田さんも「農業塾は地域に根差すJAにとって重要な取り組みです。私たちも助成金による支援に加え、他地域の優良事例をJA静岡市と共有して知見を役立ててもらうなど、活動がより充実するように協力していきたいです」とメッセージを送ります。

これからもJAとJA共済連が連携し、地域農業の活性化に取り組んでいきます。

取材協力者のご紹介

JA静岡市
営農経済部
営農課 主任
堀川晃宏さん

［地元の好きなところ］

都会すぎず田舎すぎず、気候も温暖で、色々な意味でちょうどいいところが気に入っています。気候の影響なのか、穏やかで温かな人が多いので、とても暮らしやすいです。

［休日の過ごし方］

家族と過ごすのが一番ですね。子どもと一緒に出かけることも多く、テーマパークで遊んだり、じまん市で開催されたイベントに親子で参加したこともあります。

堀川さんに！ 一問一答

農業塾での指導について

塾生を教える時に重視することは？

私が１年間で教えられるのは「農業の基礎の基礎」。でも基礎さえしっかり身につけば、畑に出ても困らないし、出荷者として独り立ちできると考えています。

出荷者を育成するために心がけていることは？

塾生によく話すのが「畑では農作物、売り場に並べば商品」。自分が買い物客ならどんな見た目や大きさの商品を買いたいか、畑で育てる時から意識するように伝えています。

塾生や地域住民との関係について

農業塾の活動でやりがいを感じるのは？

満足度の高い講習を提供できた時です。塾生がニコニコしながら「受講してよかった」と言ってくれた時は、心の中で「よし！」とガッツポーズします（笑）。

地域住民と JA の関係をどう感じていますか？

組合員以外はJAを利用できないと誤解されることも多いのですが、出荷者を増やしてじまん市を盛り上げれば、地域住民がJAを知る接点として、直売所が大きな役割を果たせると期待しています。

JA共済連 静岡
管理部 企画管理課
主幹
疋田貴代美さん

［地元の好きなところ］

自然が豊かで山も海も楽しめて、少し足を伸ばせば伊豆などの有名観光地にもアクセスできます。食べ物もおいしく、静岡特産のお茶を淹れて一服すると心が落ち着きます。

疋田さんに！ 一問一答

農業塾について

農業塾を支援する理由は？

私が住む地域でも耕作放棄地を目にすることが増えているので、地域の農業基盤を強化し、担い手を増やすJAの取り組みを支援することは大きな意義があると感じています。

塾生の販売体験を見た感想は？

地域の人たちが「安い！」「新鮮ね」と喜んで野菜を買ってくださるので、塾生も嬉しそうでしたね。野菜を育てるだけで完結せず、売ることを重視したカリキュラムの意義を改めて理解できました。

JA との連携について

農業塾の他に静岡県本部と JA の連携は？

県本部が実施するイベントにJAのマルシェを誘致したり、景品としてJAから農産物を提供してもらうことで、来場した地域の人たちに地元の特産物をPRしています。

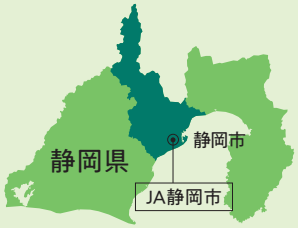
JA の活動支援を通じて得られるやりがいとは？

地域の農業や農家を支えるJAを支援することで、間接的ではありますが、自分も地域に貢献できるのがやりがいです。JAの担当者から支援に対する感謝の言葉を頂いた時は、私も嬉しくなりました。

［静岡県 JA静岡市］

JA静岡市は、平成4年9月1日に市内5農協が合併し、静岡市内（葵区・駿河区）に大型農協として誕生しました。静岡市（葵区・駿河区）は、南は気候温暖な駿河湾沿岸から、北は3000m級の山々がそびえる南アルプスまで南北に約84kmと長い地域です。その大部分が山間地で平坦地はわずか7％にすぎません。その地域の条件を生かして、海岸地域ではいちご、葉生姜、そさい、桃等の施設園芸が発達し、山間部ではお茶を中心にみかん、わさび、しいたけ等を栽培して特色ある農業生産が行なわれています。

〈 JA静岡市 概況 〉
- 組合員数　26,988名（うち正組合員8,827名）
- 職員数　539名
- 主な農産物　お茶・いちご・葉生姜・みかん・わさび・自然薯・しいたけ・他



※JA静岡市は葵区、駿河区を担当しています

Instagramでも JA・JA共済の地域貢献活動を紹介しています。

「どやふる/DOYAFUL Powered by JA共済」
@doyaful_jakyosai

「JA共済 地域貢献活動 PROJECT STORY」は今後もシリーズとして発行を予定しています。同取組みを動画で紹介している「一緒に地域を咲かせよう」もぜひご覧ください。

県域独自の地域貢献活動を動画で紹介
「一緒に地域を咲かせよう」

JA共済　咲かせよう　検索

▶ https://social.ja-kyosai.or.jp/prefecture_case/

編集後記

じまんの農業塾は、農業者として必要な知識を学ぶだけではなく、農業者同士、そしてJAと農業者といった、人と人との繋がりも生んでいる、かけがえのない取組みでした。
塾生の皆さまが大切に育てたキャベツを私も購入しいただきましたが、甘みがぎゅっと詰まっており、今までで一番美味しいキャベツでした。お近くにお越しの際は、ぜひ、じまん市に出荷される美味しい農産物を楽しんでくださいね！（西川・服部）

発行：JA共済連 全国本部 農業・地域活動支援部